

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 18日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730690

研究課題名（和文）課題追究学習を主軸とした高等学校「総合的な学習」の実践モデルの構築

研究課題名（英文）Development of the practical model of Integrated Studies based on subject research learning in senior high school.

研究代表者

安達 仁美（ADACHI HITOMI）

信州大学・教育学部・助教

研究者番号：30506712

研究成果の概要（和文）：

高等学校における「課題追究学習」を主軸としたキャリア教育としての総合的な学習の意義を明らかにしその実践モデルの提案するために、課題追究学習を経験した卒業生の追跡調査と、青年期の価値形成に着目し、クリティカルな思考を育むグループディスカッションのカリキュラムについて検討した。

研究成果の概要（英文）：

In order that meaning of the integrated study as career education which set the principal axis as "subject research learning" in a high school may be clarified and the practice model may propose, The follow-up survey of the graduate who experienced subject research learning, and the curriculum of the rap session which cherishes critical thinking paying attention to value formation of adolescence were examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：教育方法学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：課題追究学習、キャリア教育、総合的な学習

1. 研究開始当初の背景

近年、学校から職業への「スムーズな移行」が学校教育の課題とされ、キャリア教育が推進に力が注がれており、その一つの方策として総合的な学習の時間を有効に活用したキャリア教育の在り方が求められている。総合的な学習におけるキャリア教育としては、約8割の学校で総合的な学習を利用して職場体

験などの体験活動を行ったことが明らかになっている(国立教育政策研究所 2006)。国の教育政策でも、インターンシップの実施拡大のための方策が述べられ、そして、それらの実践の評価としては、職場体験学習やインターンシップの意義を明らかにした研究が多数報告されている(福岡 2002, 上西 2001, 高見 1999)。

しかし、総合的な学習におけるキャリア教育の推進が期待される中、高校の総合的な学習に関しては、その実施状況に関する問題点がいくつか指摘されており（橘 2006,北村 2005）、その要因は、主に以下の4つに整理できる。

(1) 総合的な学習の時間が、授業の補習や進路指導に当てられるなど、「生き方指導」ではなく、大学の入り口のみを意識した「受験指導」に当てられる傾向にあること（望月 2001,2002）。

(2) 教師の教科専門性が高く、教科・科目別の学習活動が主であるため、教科横断的な活動が行われにくい傾向にあるなど、教師の資質の問題（佐々木 2003 など）。

(3) 小・中学校の総合的な学習では、身近な地域を題材とした実践の成果が報告されているが（千 2006,小泉 2004）高校は地域が広範囲に及び地域題材を生かした活動が実施しにくいこと。

(4) インターンシップなどの体験的な学習は行われているものの、事前学習による活動への動機づけや、事後学習によるまとめの学習が希薄なままに、単発的に行われる傾向にあること。

これらの中で(1)～(3)の要因は、学校経営や教育方針、地域の環境に深く関与するため、早急な解決が難しい問題である。しかし(4)に関しては、高校の総合的な学習のモデルとなり得る実践事例から、体験的な学習の意義について明らかにし、他校でも共有可能な実践モデルを提案することによって、その要因を取り除くことに寄与できる可能性がある。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、高等学校におけるキャリア教育としての総合的な学習の中で、インターンシップや職場体験学習など意義が

意識されやすく、キャリア教育としてく見えやすい>実践ではなく、「課題追究学習」を主軸とした総合的な学習の意義を明らかにした上で、その実践モデルの提案を試みることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 卒業生の追跡調査

課題追究学習を主軸とした総合的な学習を行っている名古屋大学教育学部附属高等学校の総合人間科を事例として取り上げ、卒業生の高校1年生から大学四年生までのキャリア意識の変容過程と総合的な学習との関連を縦断調査し、高等学校でおこなった課題追究学習のキャリア教育としての意義を検討した。

(2) クリティカルな思考を育むカリキュラムの検討

DeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プロジェクト (2003) において3つのキー・コンピテンシーが提案され、「クリティカルな思考力」はその核心に位置づけられた。そこで、青年期の価値形成に着目し、総合的な学習における課題追究学習で求められる、クリティカルな視点の形成過程について考察するために、主体的な学習集団において行われた抽象的な概念をテーマとしたグループディスカッションを事例として取り上げ、クリティカルな視点の形成過程とその要因について検討した上で、カリキュラムの意義と課題について考察した。

4. 研究成果

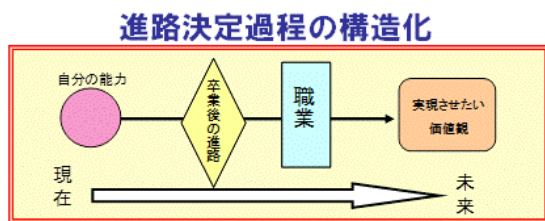
(1) 卒業生の追跡調査

名古屋大学教育学部附属高等学校を卒業し大学4年生となったHに対して半構造化インタビュー調査を行った。Hは研究対象者として、高校1年生の時から筆者が長期的に追跡をしている生徒である。よって、高校3年間

の総合的な学習の時間での活動実態に関する資料の蓄積があり、さらに各学年末には1年間の総合的な学習の時間の活動実態とキャリア意識に関する半構造化インタビュー調査を実施している。

本研究においては、Hが大学を卒業する時点でのキャリア意識の変容と、高等学校で取り組んだ総合的な学習との関連を明らかにするため、Hの高校時代の調査資料も分析の対象とした。

Hの高校1年生から大学4年生までのキャリア意識の変容過程を表すために、自分の能力に対する自覚と、進路選択、実現させたい価値観について下図のように図式化し、時系列に並べ比較した。



その結果、Hは、自己の進路選択、職業選択の際に、自己の学力や性格との適正や、実現性、安定性、また、世間体なども考慮しながら、多様な選択肢の中から模索し進路を決定していることが明らかとなった。また、自身の学力で合格可能な大学へと志望大学を変更したり、臨床心理士、小学校教諭、幼稚園教諭、おもちゃ企業へと希望職種を変更したりするなど方向転換をはかり“折り合い”（川井 2000）をつけている様相がみられた。特に高等学校の期間には、多様にキャリア意識が変容しており、その分岐点には、総合的な学習の時間において課題を追究していく過程で「子どもを感化させたい」という価値観が深化していく過程が見て取れた。

また、課題追究学習を通して深化した「子どもを感化させたい」というキャリア意識の

根幹を支える実現させたい価値は変更されることなく、“折り合い”をつけながら連続していることが示唆された。

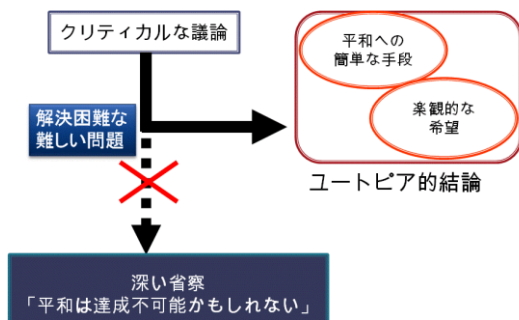
（2）クリティカルな思考を育むカリキュラムの検討

クリティカルな思考について、アレク・フイッシャー（2005）は①能動的であること、②持続的であること、③合理的であること、④反省的、メタ認知的であることの4つの特徴を挙げている。このような特徴を持つクリティカルな思考とグループディスカッションとの関連について、廣岡、横矢、中西（2006）は、さまざまな人と議論をすることが学生のクリティカル・シンキングの志向性を高める可能性があるとして主張し、また、テッサ・モーリス・スズキ（2002）は、批判的想像力を促すためには、圧力なしに発言可能な「会話」の空間の創出が重要であると提言している。

そこで、クリティカルな思考が必要とされる「平和」をテーマとしたグループディスカッションを取り上げ、平和のディスコース（人々が現実をどのように意味づけているかを表す一連の言葉、言説）がどのように展開されているのか、さらにグループディスカッションを通じた参加者たちのディスコースの変容の実態について分析した。

その結果、グループディスカッションの中で、参加者たちが自己の思考や発言を省みる姿や、多様な価値観や異なる立場からの見方に言及する姿などがみられ、クリティカルな視点をもって思考していることが示唆された。しかし一方で、下図のようにクリティカルな話題を回避し話題転換する、難しい話題が短絡的で安易な手段に置き換える、根拠のない耳障りのいい抽象的な全体論でまとめようとするなど、必ずしもクリティカルな視点を獲得しきれていない状況も明らかとな

った。



(3) まとめ

本研究では、高等学校における「課題追究学習」を主軸としたキャリア教育としての総合的な学習の意義を明らかにし、その実践モデルの提案するために、課題追究学習を経験した卒業生の追跡調査と、青年期の価値形成に着目しクリティカルな思考を育むグループディスカッションのカリキュラムについて検討した。

課題追究学習を通してキャリア意識の根幹を支える価値が深化し、既習後も妥協的な方向転換ではなく、実現させたい価値が“折り合い”をつけながら連続しているという点が明らかとなった。さらに、グループディスカッションに焦点をあて、価値形成の過程に着目すると、ディスカッションを通して自己の思考や発言を省みる姿や、多様な価値観や異なる立場からの見方に言及する姿などがみられ、クリティカルな視点をもって思考していることが示唆された。また一方で、話題転換や短絡的で根拠のない抽象的な全体論でまとめようとするなど、必ずしもクリティカルな視点を獲得しきれていない課題も明らかとなった。

山田・渡部(2009)は、方向転換プロセスとして、①「やりたいこと」が実現できないかもしれないと思った時に起こる、現実との葛藤、②「やりたいこと」へのこだわり(＝とらわれ)からの解放と新しい視点の獲得、

③もう一つの価値基準への気づき、④別の進路への親密性の4つを示している。キャリア教育において、「生き方在り方」指導や「夢追い型」指導の見直しや、「やりたいこと」から「やれること」への方向転換の必要性が問われているが、今後はキャリア意識の根幹を支える価値の連続性に着目し、方向転換(折り合い)によって価値が深化することを考慮したカリキュラム作りが求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

- ①安達仁美、野木森三和子「グループディスカッションを通じたクリティカルな視点獲得の可能性」日本カリキュラム学会第22回大会、2011年7月16日、北海道大学
- ②Miwako NOGIMORI, Hitomi ADACHI "What Transformed their Perceptions of the Concept 'Peace', and How?", CSSE Annual Conference2010, 2010年6月1日, Concordia University, Canada
- ③安達仁美「キャリア意識の連続と変容に関する一考察—高1から大4までの縦断的な語りの分析を通して—」質的心理学会第6回大会、2009年9月13日、北海学園大学
- ④安達仁美、野木森三和子「主体的な学びの場におけるクリティカルな思考の育み—『ユネスコ・ユースセミナー2006』を事例として—」日本カリキュラム学会第20回大会、2009年7月12日、千葉大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安達 仁美 (ADACHI HITOMI)
信州大学・教育学部・助教
研究者番号：30506712

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし